

# かたつむり

森岡 正作

## 魚籠の中

眼前に海見ゆ夏のぶつかり来  
雲来れば雲に乗りたるあめんぼう  
つんつんと人語に応ふ目高かな  
かたつむり愛の言葉は聞き洩らす  
紫陽花の毬みな宙に放ちたし  
羽抜鶏相手かまはず挑みをり  
甚平のまた担がるる発起人

真鍋呉夫編の『能村登四郎句集』という小冊子の中に、梅雨時の鮭を詠んだ「魚籠の中撫然と髭の梅雨鮭」という句を見つけた。魚釣りが好きかどうかではなく、釣り人がいて側に魚籠などがあるとつい覗きたくなる。きっと先生も「釣れますか」などと言つて、魚籠の中のどつてりした鮭を見たのである。

私は中学、高校生の頃よく鮭を釣つた。二十センチ余りのものはそのまま、大きいのは輪切りにして醤油で煮た。獲れ過ぎて手の込んだ料理をする気力もなかったのである。鮫鱗は切られて匂になるが、鮭は大きく髭が立派であればよいのである。「梅雨鮭」と「梅雨」が付いて貫禄も出るが、団体の大きな顔に小さな目、飄々として愛らしくもある。先生の見た鮭は釣られたゆえにふて腐れ、憮然たる表情になつたのである。何しろ鮭は地震学者様である。食べ過ぎたことを反省し、今は、甚平を着た隣のおじさんと同じくらい親しく思うのである。